

【事業実績】

1. ミュージアムと地域を活性化させる企画立案

(1) 活性化方針の検討

①ミュージアム魅力発信検討会議(検討会議1)

事業を実施するにあたって、各館担当者によって、コロナ禍における問題点等を整理、意見や情報共有し、その後の効果的な事業展開に繋げることができた。

2. つながり・ひろがるミュージアムと地域

(1) ミュージアム情報の発信充実

①ミュージアム情報冊子の印刷・配布(情報冊子1)

各ミュージアムとその周辺地域の魅力を盛り込んだ情報誌を3回(14~16号)、各回30,000部作成、全国1,000か所以上に発送し、広報を進め、特に若い層の掘り起こしに努めた。<https://ocm.osaka/pr/>

(2) 市民参加によるイベント開催

①学芸員等による長期連携講座の開催(イベント1)

2月の毎週土日、各館の学芸員15名が自らの専門分野について、日ごろの研究成果などについて、オンラインライブ配信で実施した。視聴者は平均80名で、北海道から福岡まで及んだ。概ね好評で、質問も平均3回寄せられた。コロナ禍のもと、安全かつ双方向、広範囲に対応でき、今後の発展性も確認できた。



視聴者の声:「オンラインで無理なく全部視聴することができた。逆に良かったかもしれない。」「硬いお話をおもしろいトークでかみ砕いて解説していただいたので、今まであまり興味を持っていなかった銅鏡や茶釜にもあらためて興味がわきました。じっくり見てみたいと思います」など。

②地域の自然に関わる市民団体の文化祭イベントの開催(イベント2)

感染症拡大防止の観点から、YouTubeライブ配信によるシンポジウム「新型コロナウイルス下での観察会を考える」を開催した。オンラインでの視聴は、常時130~150人程度(最大158人)、見逃し配信を含む視聴数は1480回であった。発表や質疑応答を通じて、コロナ禍においても五感を通じた観察会の需要があることが分かった一方で、安全に運営できている観察会の事例共有が不足している現状が見えてきた。

(3) 文化・科学を担う人材の育成

①大阪文化の担い手育成のための教員研修の開催(イベント3)

「教員のための博物館の日」に参画する形で、8月7日、大阪歴史博物館において、60名規模の教員研修を行う予定であったが、実施内容から密の状況を避けられず、感染症拡大防止の観点から中止とした。

②超高感度望遠鏡による人材の育成とプログラム開発(イベント4)

従来の100倍もの超高感度を持つ電子観望専用天体望遠鏡eVscopeを試用し、その特性にあう教育プログラムを構想し、市民対象事業の指導者の練習をふまえ、指導マニュアルを作成した。研究会では「都会でここまで見えるとなると、従来とは全く考え方を変えなければいけない。嬉しい悲鳴だ」「この望遠鏡では銀河、星雲、星団など従来やりたくてもやれなかったものが中心になる」などの意見が出された。コロナ禍のため、当初の予定された広く市民対象のイベントとしては実施できなかったが、新しい観望会の創出という大きな成果が得られた。

(4) こどもや学生のミュージアム利用促進

①地域の児童・生徒の来館促進にかかる資料解説カードの作成(地域児童1)

大阪市内6つのミュージアムが連携して所蔵作品や展示資料の解説カード(5種類)を作成し、来館者に2月から無料配布を行った。新聞にも取り上げられ、集めてみたいと各館に問い合わせが多数寄せられた。<https://ocm.osaka/education/6163/>



3. 国際化拠点としてのミュージアム

(1) 外国人利用者への情報発信

①訪日旅行者向け案内冊子の製作(国際発信1)

従来の日本語版からの翻訳でなく、当初から英語圏のライター、編集者により、訪日旅行者の目線に沿ったミュージアムガイドを作成した。主要ホテル、観光所、空港案内所などに配置した。洗練されたデザイン、編集、読み応えのある内容で、各所から歓迎され、今後の海外向けガイドのモデルを得ることができた。<https://ocm.osaka/news/6707/>

②スマートフォンを利用した展示解説の多言語化(国際発信2)

大阪市立科学館において、スマートフォンの専用アプリを用いて、展示解説を館内外で体験できる「ポケット学芸員」の韓国語版を作成した。これまでの英語、中国版とともに、さらに展示情報の理解、国際発信の進展が期待できる。

③館蔵資料オープンデータ化による国際発信(国際発信3)

大阪市立東洋陶磁美術館が所蔵する国宝・重要文化財を含む主要作品 20 件について、高精細かつ高演色の撮影を行い、多言語のオープンデータサイトを制作した。今後、館蔵品への世界中からのアクセスを一層増やし、来館促進とともに、デジタル画像の教育研究利用や商業利用、さらには新たな文化創造活動など多方面の利活用の促進が期待できる。<https://websites.jmapps.ne.jp/mocoor/>

④訪日旅行者向け夜間利用の促進(国際発信4)

コロナ禍による訪日旅行者の激減を受け、若者層や家族層を重視した企画に修正し、夜間イベント「はやぶさ、はやぶさ2から未来へ」を2月6日に企画したが、大阪府の緊急事態宣言の発令を受けて、中止した。

4. 誰もが利用しやすいミュージアム

(1) ミュージアムのバリアフリー化

①タブレットを利用した発話コミュニケーション障壁の低減化(ユニバーサル1)

大阪市立自然史博物館において、来館者との会話補助のために、発話をリアルタイムでテキスト化し表示するツール(アプリ)を入れたタブレットを学芸員相談カウンターに導入した。感染症拡大防止のアクリルカバーの設置、マスク着用という環境下、特に高齢者にみられる発話音声聞き取りづらいという問題に対して、一定の効果をあげ、来館者に感染リスクを避けられるという安心感を生むこともできた。



②視覚障害者向け展示・解説点訳書の改善(ユニバーサル2)

視覚障害者の障壁となる点についての展示および施設全体のコンサルティング事業を行い、触れる展示へのアクセスしやすさ、最寄り駅から博物館までの道のり、館内トイレなど設備、照明なども状況を確認し、問題点や改善点の提案などを受けた。スタッフを対象に視覚障害者への接遇研修も実施し、20名が参加した。今後の業務の参考になった、という意見があった。改善点提案などを踏まえて、解説点訳書と触れる展示の解説パネル文の点訳を作成した。



5. 地域の魅力再発見・再活用・再発信

(1) 地域資料の発掘と活用

①地域に眠る映像資源発掘プロジェクト(地域魅力1)

地域に眠る映像資源(8mm、16mmフィルム等)を発掘すべく、大阪市北区役所の協力も得て、映像フィルム募集を行い、8団体・個人から提供を得た(うち計34タイトルを調査実施)。この映像を活用し、7プログラム(のべ8日12回)の上映会をピアノ等の楽器伴奏付きや学芸員の解説付きで実施した(参加者計157名)。参加者からは「懐かしい昔が思い出される」「時代ごとの価値観がわかって面白かった」などの感想があり、アンケートの満足度も高かった。また、大阪市役所ロビーでも映像上映を行った。



募集サイト <https://co2ex.org/ofa2020-bosyu/> フィルム公開動画 https://www.youtube.com/watch?v=_ETUDAKXaaU